教え子はバンパイア

月乃宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
教え子はバンパイア

【Ｎコード】
Ｎ９１２０Ｓ

【作者名】
月乃宮

【あらすじ】
正美（まさみ）は堅物で知られる高校教師。元教え子で、今は大学生の福永（ふくなが）薫（かおる）とは秘密の関係がある……それは彼が『バンパイア』で、正美が『血の提供者』であること。血を飲まねばならない体質の薫を気づかい、自らの血を提供していた正美だったが、最近ふと思うのだ……もしかして薫は無理してるのではないかって……真面目な教師とバンパイアの青年がくりひろげる愛の攻防戦？です。

（1）

高校教師になって二年目の秋。私こと長岡正美（ながおかまさみ）は神妙な顔で廊下を歩いていた。いつものように授業開始一分前に教室の扉を開く。

「静かにしろ！　さっさと席へ戻れ！」

私の怒声に今まで騒いでいた生徒の幾人かはピタリと口を閉じ、おびえたような眼で私を見つめる。しかし中にはけろりとした様子の生徒もいて……

「怒らないでよー、マサミ先生」
「そうだよ、眉間にシワ寄るよ？」
「もしかしてアレ中？」
「男できないよー」

私はバンッ、と出席簿で教壇を叩いた。

「余計な御世話だ……教科書３６ページ。次無駄口叩いた奴から容赦なく当てるからな」

ようやく静かになった。だが彼らの指摘は一部当たってはいる。確かに私は機嫌がよろしくない。ここ最近はずっとそうだ。
だからって別に仕事に私情をはさむつもりは毛頭ない……つもりはないが、私だって人間だ。機嫌が悪い時ぐらいある。悩むことだってあるんだ。

「長岡センセ〜」

放課後、国語科準備室の扉から顔をのぞかせたのは、現国の西田(にし)小百合(さゆり)先生だった。生徒からは『サユリちゃん』の相性で親しまれている、私と同年代の二十四歳。にもかかわらず、いつまでも女学生のように若くて愛嬌のある女性だ。

ちなみに私は古文担当だが、その科目のように頭の中身も古臭くて『おカタイ』らしく、生徒には恐れられているというか敬遠されているというか、ともかく短い教師生活の中で生徒に懐かれた例はない……ただ一人を除いて。

「今日は金曜でしょう、どうです一杯？」

クイッと手首をひねって盃を傾けるしぐさをする西田先生は、かわいらしい外見からはとても想像できない酒豪だ。

「いや……今夜はちょっと」

「あれれ、デートですかぁ？」

私はあわてて「ちがいます」と否定したが、西田先生は新しいおもちゃを見つけた子供のように目を輝かせて近寄ってきた。

「誰ですか、もしかしてまた若い子……」

「『また』とは人聞きの悪い、私がそんな器用な性格じゃないのはご存じでしょう？　それに福永は特殊なケースで、今だって単に世話を焼いてるだけで……」

そこで私ははっとして口を閉じた。西田先生は「ほほぉ～」とひとの悪い笑みを浮かべる。

「まだ付き合っていたんですねぇ、福永馨(ふくながかおる)くんと」

「……」

私は嘘がつけない性格だ。故に誤魔化しようがない。

私が彼と会っている（付き合ってるんじゃない）ことを知っている唯一の人間が西田先生だ。別に私が故意に教えたわけではなく、事故的に知られてしまったのだ……彼が私のアパートに来てるとき、偶然にも西田先生が訪ねてきて鉢合わせてしまったのだ。

「長岡先生もすみに置けませんね～、五つも年下なんて！　でもちょっとうらやましいかも」

「あいつとはそんな付き合いじゃありません」

「またまたぁ～。まー、彼は去年卒業してますからギリでセーフですけどぉ。私としては長岡先生には、もっと年上か少なくとも同年代の人で、できれば包容力のある男性をオススメしたいですね～」

「いりません、そんなモノ」

「そうだ今度合コンしません？　私が企画しますから是非！」

「結構です、と言っているでしょう」

「じゃ、来週の金曜日空けといてくださいね～」

「ちょっと……」

強引な誘いに対して、はっきりと断れなかったのには訳がある。

それは私を、ここ最近悩ましている事情と関係していた……その事とはつまり、福永の件だ。

いつもの帰り道、いつものスーパーに寄り、いつもより少しだけ多めに食材を買う。荷物をかかえて一人暮らしするアパートにたどり着き、門のところから自室の窓を見上げるとすでに明かりが灯っていた。

「おかえり、先生」

ドアは開ける前に開かれ、玄関には予想通り嬉しそうに微笑む福永の姿があった。私の両手から重いスーパーの袋を軽々と取り上げ、キッチンへ向いながら中をのぞき込む。

「今夜はポークソテーとサラダかな？　あ、プリンがある」
「そのメーカーの好きだろ、お前」
「うん、うれしー。サンキュ、先生」

そう言ってふり返った福永に、私は複雑な気持ちになる。綺麗に整った顔に甘い微笑……きっと大学でもモテるだろうに。

「待ってろ、今すぐ夕飯にするから……と、その前にホラ」

ふと思いだして、私は肩までかかる髪をかきあげた。飲みやすいように、うなじを福永に向ける……彼の『食事』のために。
やや短い沈黙のあと、首の付け根に温かく柔らかいものがそっと触れた。私は次に続く衝撃に身構えたが……なぜか唐突に離された。

「……いらないよ、先週もらっただろ」

髪を押し上げる私の手を軽くにぎって苦笑を浮かべる福永に、私

は焦れたように眉を寄せた。

「何を言っている、お前は十九の育ちざかりじゃないか」

「だから前から何度も言ってるだろ、月二回で十分だよ」

「そんな事言って、またどこかで倒れても助けてやれないぞ」

「だーかーら、先生に助けられたのはたまたま。それにたった一度だけだし。いくら俺がバンパイアだからって、今じゃ血も薄くなってきてることだし、そんな簡単に倒れたりするはずないって」

そうなのだ、この目の前に立つ私の元教え子……福永はバンパイアなのだ。つまり血を摂取しなくては生きていけない体質である。

さかのぼること去年の夏……まだ教員生活一年目の高校教師だった私は、副担任をしていたクラスの生徒である福永が廊下のすみで倒れているところを発見して保健室に連れて行った。そしてそこで、彼の事情を知ることになった。

――血が必要なのか。ならば私の血を飲めばいい。

新米教師として生徒を助けたいという一心からか、私は彼に血液の提供を申し出た。それ以来、福永には月二回の約束で血をあげることになり、それは彼が卒業した後も続いている。

でも次第に約束した日以外にも会うようになり、私は緊急時（つまり急に血が必要になった時など）を考慮して合鍵を渡した手前、血を必要としなくてもフラリと訪ねてくる彼の行動を黙認してきた。別に、それは嫌じゃなかったから。

ただ最近は思うのだ……彼ももう年頃の青年だ。彼女の一人や二人欲しいのではないか、と。そしてどうせ血をもらうなら、付き合

っている彼女からもらった方がいいのではないかとも。

以前、福永から聞いた話では、バンパイアは異性のパートナーを見つけ、そのパートナーから血を分けてもらって生涯を過ごすことが理想なのだそうだ。

だから決して年上の、自分の高校時代の教師だったというだけの、恋愛対象には到底見れるはずもない女からの血液を、こんなふうにいつまでももらっている場合じゃないはずだ。

そんな話をそれとなく福永に言ってみたこともあったが、彼は今時の若者らしくあっさりと『じゃあ、俺に彼女ができるまでね』と無邪気な返答をよこした。

だから私はその言葉を信じ、福永から『もう先生の血は必要ない』と切り出されない限りは、決して私から関係を切るまいと心に誓った。また彼に倒れてもらいたくなかったからだ。

でも……と思う。

もしかして福永は、今まで血を分けてもらった手前、私に負い目を感じているのではないか？

だから大学生になっても彼女のひとりも作らずに、私の元に通い続けているのではないか。いや、もしかするとすでに彼女はいるけど無理に私の元に通ってきているのではないか。

そんな風に考えてしまうのも、私の中で福永の存在が特別になってきているからだ。これが恋愛感情と呼べるかどうかは分からない……しかし今、福永に会えなくなってしまったら嫌だ、と思う自分がいる。

最初の頃は月二回だったのが、ここ数か月はほぼ毎週、福永は私のアパートにやってくる。そして私の作った夕食を食べていく。
私は彼の前では常に『先生』であり『血の提供者』である。そして彼はきまって私の前では『元・教え子』であり、そして『バンパイア』なのだ。

「そんなに心配そうな顔しないでよ、先生」

福永の声に、いつの間にか物思いにふけっていた私は我に返った。

「じゃあさ、今夜は先生のトコに泊まらせてよ。一晩中一緒なら、いつ血が必要になっても安心だろう？」

――ひ、一晩中一緒！？　福永と！？

「ばっ……そんなこと言われるくらいなら、今さっさと飲んでもらった方がましだ！」
「そんなに顔を真っ赤にして怒るなよなー。分かったよ、今夜はあきらめる。でもいつか絶対お泊りしてやるからな」
「私の家に泊まって何が面白い。うちにはゲーム機もお前の好きなお笑いＤＶＤもないぞ」
「先生がいるじゃん」

ニッ、と笑って私の顔をのぞき込む福永の、男としては少し色白の顔を眺めながら、私は『こいつはいつの間にこんなに背が伸びたのだろう』と考えていた。

たしか出会った当初は、女としては背の高い私の方が彼の顔を見下ろしていたはずなのに。日を追うごとに、どんどん大人の男らしくなる。

だから思うのだ……このままでは、お互いのためにもよくないと。

（つづく）

（2）

「かんぱーい、お仕事お疲れさま～」

そして金曜日の夜。

居酒屋で周囲がビールジョッキをあおる中、私はひとりウーロン茶を手にしていた。

店内は洋風居酒屋らしく、なかなかお洒落な雰囲気であるが、やはり人の声が騒々しい。周囲が打ち解けたムードとなりつつあるのに、場慣れしてない私だけ一人緊張で固くなっている。

私は西田先生に半ば引きずられるようにして飲み会に参加していた。到着してみると、まるでしめし合わせたかのように男女三人ずつ、きれいに分かれていた。これはもしかして俗に言うコンパ、ってやつじゃないのか？

「センセ～どうしたんですかぁ？　もっとしゃべって、しゃべって」

「……西田先生」

「せっかく人数合わせたんですから、ね？　結構イケメンぞろいでしょ？　あ、でも右端はダメですよ～、私が狙っている人ですから」

あきれた、やはりコンパだったのだ。西田先生め、『ただの教員同士の飲み会ですよ』って言ってたのに。私は出会いの場なんて、お膳立てしてもらいたくないのだ。

……とは思いながらも、どこかで期待してたのだろうか。

嫌がっているふりをして、本当はこんな場を望んでいたのかもし

れない。
福永とは違う、大人の男性と知り合いになる。そうすれば、福永とはもう会えなくても平気になる……彼を、私から解放するキッカケになる。

「何の教科を担当されているんですか」

隣の男性に声をかけられ、私は思考を一時中断させた。ビールを手にしたその男性は男らしい体格をしており、顔はどこかお人よしそうで好感が持てる。

「へえ、古文ですか。僕は主に現国担当なんです。たまに古文も担当しますが、奥が深くてまだまだ勉強不足です……生徒の手前、こんなこと言えませんけどね」

なかなか好青年な発言をする。しかし私の眼は、あさっての方向にくぎ付けだった。私たちのテーブルとは反対側の奥の一角にある大テーブル……あれは大学生達の飲み会だろうか？

そこに、福永の姿を見つけたのだ。

正直驚いた。まさかこんな場所で鉢合わせるとは。
どうやら向こうも私の姿に気がついたらしい。笑っていた顔が一瞬不自然にかたまって、それからつい、と顔をそらされた。

その行動に、私はかなりのショックを受けてしまう。

あとはもう、周りが何言っても聞こえやしない。機械的に箸を動かすものの、食べ物の味なんか分からない。こんなに大勢の人間に囲まれているのに、なんだかひとりぼっちでいる気分だ……頭の中

には、嫌な想像ばかり膨らむ。

――もしかして、福永もコンパなのか。彼女さがし？

やがて視界の端に、テーブルから立ち上がる福永の姿が見えた。彼は何やら申し訳なさそうにつぶやくと、鞄を手に出口へと向かう。それにつられるようにして、思わず私も席を立ち上がっていた。

「すみません、私もう帰ります」

西田先生が何か言ったかもしれないが、それも耳に届かない。周囲の喧騒（けんそう）をかいくぐって店を出れば、目が自然と探し物をするように辺りをさまよっていた。

福永はやはり、すぐに見つかった。

店の少し先にある路地裏で、屈みこむような姿勢で塀にもたれている姿があった。

――もしかして、また貧血……？

「福永！」

私がかけつけると福永はのろのろと顔をあげた。顔色がいつもより青白く見える。私は彼の両肩をつかむと、視線を合わせるように伏せた瞳をのぞきこんだ。

「しっかりしろ、貧血か？」

ゆるく首をふって顔を伏せてしまう福永に、私はこのままじゃらちが明かないと判断し、路地裏から飛び出してタクシーをひろった。

いまや地面にしゃがみこんでいる福永の肩を、えいやと自分の肩にかけて引っぱり上げる。

「もう大丈夫だ、私がいるから安心しろ」

「……先生の家へ行くの？」

「ああ、家へ着いたらすぐにその貧血を治してやる」

こうして私たちは夜の街をタクシーで疾走した。

自宅のアパートに戻ると、ぐったりした様子の福永をとりあえず寝室に運んだ。

ドサリ、とベッドに降ろすと、明かりもつけない暗がりの部屋で福永の目がうっすらと開いたのが分かった。私は安心させようと笑顔を向けつつ、ブラウスのボタンを二つほど外して襟元を大きく開いた。

「……飲め」

福永の視線はじっと私の首元に注がれていたが、彼はなぜだか小さく首をふった。焦れた私は、首元を福永の口元に近づけてやる。

「ほら遠慮するな。私はお前の体が心配なんだ」

「……」

「それとも体が起こせないのか？　それなら私が横になってやるから……」

そう言って福永の隣に寝転がろうと屈みこんだとたん、突然両腕を伸ばした福永が私の体をとらえ、そのまま乱暴にベッドに押し倒された。

シーツに押しつけられた格好の私は、驚いて顔を上げた。見降ろしてくる福永の白く整った顔は、どこか疲れたような表情を浮かべていた。

「分かってないね、先生」

いつもの無邪気な笑顔と違う、少し大人びた微笑を浮かべた福永が、かすれた深みのある声でささやいた。

「俺が欲しいのは先生の血じゃない」

「……」

いつかこう言われる、と分かっていたこととはいえ……いざ引導を渡されるとかなりのショックだ。

――そっか。もう私の血は必要ないのか……。

奥歯をぐっとかみしめて、みっともなく泣きださないようこらえるのが精一杯だ。福永の顔を見ているのがつらくて、思わず目を伏せてしまう。

「ほらね。やっぱり分かってない」

あきれたような声が耳元で響いた。

「俺が欲しいのは、先生自身だよ」
「……福永？」

福永の顔が、涙で少しにじんで見えた。
いたずらが成功したような、うれしそうなクスクス笑い……それが私の視界でゆらゆらと揺れ、やがて雨粒となって頬を伝い、私の乾いた心にしみこんでいく。

「かぁわいいなぁ、先生……俺、ずいぶん頑張って我慢していたからもう限界」
「ばっ……何を」
「俺の体が心配なんでしょ？　だったら助けてよ……」

甘えるような仕草なのに、なぜか大人びてて……その色っぽさに、私の脳天はのぼせたようにクラクラする。熱くほてった頬には、少し冷たい福永の手が添えられた。

手のひらから伝わってくる小さな震えは、どういう意味だろう？
初めて合わせられた唇はとろけるように熱くて、どうしようもなく甘かった。

（つづく）

（3）

「ホラふたりとも、もっと肉を食べなさい」

ぐつぐつと煮える鍋の前で、私は箸を手に固まった。

正直もう限界だ……。

「あなた、あまり無理強いはよくないわ」

「そうだよ父さん。先生は油っぽい肉は苦手なんだから」

「し、しかしすき焼きっていったら霜降りだろう！？」

福永家の夕食に招かれ、こうしてすき焼き鍋を囲んでるわけだが……大学生の薫はともかく、みんな本当によく食べる。

薫の兄と紹介された幸（みゆき）さんの隣には、私と同じく当惑した表情を浮かべる女性の姿が……幸さんの彼女の前橋（まえはし）志乃（しの）さんである。

「志乃、こっちのレバ刺しも食べろ」

「幸……」

「僕は君のからだが心配なだけだ。断じて血の心配じゃない。いや、多少はしてるが……でもそれは僕の飲む量の問題じゃなく、けっきょく君の体が」

「わかった、わかったから……お皿よこしなさいよ」

レバ刺しの並んだお皿を受け取ろうとした前橋さんと、ふと目が合った。苦笑いを向けられる。

「いつもこの調子なんですよ」

「……そうなんですか」

なんか苦労してそうだなこの人も……私は小さくため息をつくと、取り皿に盛られた大量の肉を見下ろした。隣の薫が身じろぎしたのを感じ、次の瞬間、箸を持つ手をそっと取られた。

「無理して食べなくてもいいよ、センセ」
「福永……」
「じゃ、デザートにしよう。俺の部屋へきてよ」
「ああ」

家族に失礼して中座しかけると、あちこちから非難の声があがった。

「ちょっと、薫兄さん！」
「薫、いくらなんでもはしたないだろう！？」
「兄貴をさしおいて、ずるいぞ薫」

私はあわてて皆に頭を下げた。

「すいません、ふくな……薫君は私に気をつかって」
「いえいえ。弟にだまされてはいけませんよ、先生」

幸さんの言葉に首をひねる。だまされる？　幸さんは身をのりだすようにして、人の悪そうな笑みを浮かべた……なんだろう。

「部屋に入ったら最後、おいしく食べられてしまいますよ」
「なんてこと言うんだ、兄貴！」

真っ赤な顔でさえぎる薫の姿に、私はようやく「あ！」と思い当った。

「悪い、気づけなくって。血の補給だな！？」
「はっ！？」
「そういえば最後に飲ませたのが先週末だったな。ずっと我慢してたんだろう？　すぐに楽にしてやるからな……ホラ行くぞ」
「ちょ、ちょっとセンセ？」

私は薫の手を取ると「さあ、お前の部屋へ行こう」と笑って引っぱる。薫は無言で私を見つめていたが、突然「はあっ」と大きくため息をついた。

「うん……ま、そうだね。行こうか」
「？　ああ」

すぐ横から薫の母親の「仲が良くていいわねぇ」と明るい声がひびいた。

「……で、なぜ飲まない？」
「なぜって」

再度、大きなため息をついた薫は、ベッドに座った状態で髪をかきあげ、首筋をさしだした私の隣にゴロリと寝転がった。

「どうした？　飲まないと体に悪いぞ」
「うん、まあ……あとで少しもらう」
「？　うん……そうか」

なんとも変な間があり、私は髪をおさえていた手をおろすと、薫の顔をのぞきこんだ。

「福永？」

「……」

「……薫」

「正美……」

私たちは手をからめあう。ようやく薫の口元に笑みが戻り、私はほっとして空いている方の手でそっと彼の額の髪をすいてやった。

「なあ、薫……無理はよくないぞ」

「んー」

「これからはずっと一緒なんだ。だから遠慮とかナシだからな？」

「ん……わかった」

そういってゆらりと体をおこした薫は、私の首に手をまわしてぐっと引きよせる……高い鼻が私の髪をかきわけ、そして首筋に唇が押しあてられる。

……私は次に襲ってくる衝撃を思い浮かべ、一瞬身がまえた。

「……じゃあ、遠慮なく？」

「ああ、好きにしろ」

あとで分かったんだ……求められていたものが、血じゃなかったってことが！

（おわり）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9120s/

教え子はバンパイア

2011年5月21日08時21分発行